

所 陵

ISSN-0913-1906

No. 47

関西大学博物館彙報

平成15年 9 月30日発行

[SENRYO・KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



鑰 Sharan

目次

明日香・大和の悠久のロマン	2
徳興里古墳壁画の七宝行事について	4
平成14年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介	7
「簡文館」の円い建物について	10
『伊勢物語』の彫りと摺り—博物館における体験学習の一事例—	12
鹿児島県上野原遺跡「縄文の森」を訪ねて	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3 丁目 3 番35号

Tel 06-6368-1171 (直通) FAX 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

明日香・大和の悠久のロマン

関西大学教育後援会長 田 島 俊

関西大学博物館は、一万数千点にもおよぶ収蔵品の多さと、その建物設備等で日本の大学博物館としては、屈指の研究施設と聞いています。

入学試験の難関を突破して入学した憧れの大学で、学生の学習と研究は、まず本を紐解くことから始まります。本で学ぶ文献資料の殿堂が図書館だとすれば、それを実物として確認し、見て触れて学ぶ「実学」「資料学」の殿堂が博物館だと思います。この両施設は、大学にとって車の両輪とも言うべきものですが、日本では残念ながら、独自の博物館を持っている大学は、数えるほどしかないのが実情です。

欧米をはじめ多くの国では、「大学設置基準」にあたる法令で大学博物館の設置を義務付けています。お隣の韓国でも殆どの国公私立大学で独立した立派な博物館を持っており、優れた教育機関として大きな成果を挙げています。

こうした実情を踏まえ、1996年1月文部科学省の学術審議会・学術情報資料部会は、「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」と題する答申の中で、「大学において収集・生成された、有形の学術標本を展示・収蔵する博物館の整備を図り、一般博物館学芸員のリカレント教育や、収蔵物を地域社会に公開して、知的・文化的情報発信拠点とするためのネットワーク化を、強く求める」提言を出しています。最近になってやっと関西学院大学や立命館大学等関西の私学でも博物館の建設が具体化し、東大を筆頭に旧帝大の有力国立大学も、大学博物館の現状改革に着手したと言う事です。

さて関西大学博物館では、毎年企画展を開催されていますが、私は平成14年の「明日香・大和と関西大学の考古学」～高松塚古墳発掘30周年～と、15年の「東アジアの壁画古墳」展を見せて頂きました。どちらも日本のルーツを知る上で大変興味深い展覧会で、高松塚古墳展では、網干善教名誉教授指導の下に、関西大学の多くの学生が明日香村の民宿に泊り込んで発掘調査にあたった様子や、あの極彩色壁画の女人群像が見つかり、世界的大ニュースとなった感動の

瞬間が、NHKの番組「プロジェクトX」でも見ているかのように、ひしひしと伝わり、大きな感銘を受けました。そして、このような素晴らしい研究機関を持っておられる大学の学生として、わが子が学ばせて頂ける幸せを感じました。

また平成15年の催しでは、高松塚古墳に続いてキトラ古墳でも四神図が見つかり、玄武図や青龍・白虎の他に朱雀も発見されたのを受けて、日本の終末期古墳壁画の源流は、朝鮮半島や中国との関係で考えるべきであると問題提起し、特に高句麗の同時期古墳の壁画と比較展示され、改めて考古学の魅力に心を奪われました。

ご専門の網干先生のお言葉をお借りすれば、高松塚古墳やキトラ古墳にある四神図は、高句麗壁画古墳後期の後半に見られる四神図短室墓に共通する要素はあるものの、この共通性と、それぞれの相違点を区別し、その原因を探ることが必要で、今の壁画古墳の研究では、まだ十分な異同の検討が成されずに、日本と高句麗・唐の壁画古墳が比較されており、年代的なずれや壁画の技法の差異を考慮すると、当時の日本の壁画古墳が必ずしも中国や高句麗・朝鮮半島と一体となったことや、直接の影響を示すわけではないということで、考古学は奥が深く面白いものだと、素人ながらに感心したものです。

このように見てくると、関西大学の博物館の大きな魅力のひとつは、まさに「明日香・大和



博物館展示を見学する田島会長

のロマン」を今の私たちに生きた教材として伝えてくれている事にあると思います。

学生と博物館

関西大学博物館は、私学の博物館としては、明治大、国学院大、早稲田大に次ぐ規模だと聞いております。夏季休業・冬季休業を除き毎週月・火・木・金の午前10時～午後4時まで開館し、一般の方にも開放されています。来館者は年々増えており、平成12年が4781人、内学生が1537人、平成13年が6002人、内学生が1253人となっています。一般が増えて学生が減っているのが若干気にはなりますが、本年、立派な博物館の表示看板も掲げられ、全学の学生が一度は訪れてもらいたいと思います。

さてこの拙文を書かせて頂くにあたって、平成14年度の学生の博物館実習報告を見ていましたら、なかなか面白い報告が幾つかありました。

まず4年生の建築学科の学生は、「学ぶということ、特に日本の教育は、既に決まっている解答に向かっていく技術を磨くことであり、自分もそれに慣れきっていたが、この実習から自らが積極的に何かを見出す、展示されたものから何か面白いものを発見してやろうと思うようになった」事や、お茶の文化を茶室で学び、日本の礼儀作法を教えられた感動を書き綴っていました。

また別の3年の学生は、琵琶湖博物館の感想で、琵琶湖という地域に根ざした、湖と人間という個々のあり方や関係がテーマの、市民に開かれた新しい博物館であることに気付き、入るなり「この博物館は生きているなあ」と感じたことを述べ、博物館の中には死んでいるか、あるいは瀕死のものもあり、それは入った途端に気付いてしまうものだが、ここは、子供たちが走り回り、展示物は手で触れることができ、学芸員は見学者に解説する「インストラクター」ではなく、展示交流員と呼ばれていて、あくまで見学者と一緒に考え、その興味を博物館の外の世界まで広げようとしている様を目の当たりにし、目から鱗が落ちたと記しています。

このような感性の鋭い若者たちに受け入れられる博物館とは、どの様なものなのか、考えさせられながら読みました。

文化の発信基地

私は大学卒業以来35年、テレビ局で報道・編

成・スポーツ・メディア等の仕事をしてきました。その中で常に心がけていたのは、「放送は地域文化の発信基地でありたい」ということです。社会情報もお笑いも、スポーツもそしてショッピングすらも文化だと思います。大学で勉強して身に付けてほしい教養は、文化を見る目だと私は思いつつ、例年採用試験の面接をしてきました。

ある事件現場に立って、生でレポートをする場合、その依ってたつ基本姿勢は、そのレポーターの人間性であり、まさにそれまで生きてきた生き様しかありません。欧米、特にアメリカのテレビメディアのように、「事実だけを客観的に伝えよ」と言われても、見たもの聞いたもの等、さまざまな断片的情報を組み立て判断し、伝えるべき事を的確に表現するのは、その人だけの固有の才能であり、経験です。

考古学・博物館とどういう関係があるの？と聞かれそうですが、正に文化、すなわち私ども日本人の依って来るルーツに夢を馳せ、それを学ぶことは、必ず人間一生のうちのある時期に、一度は通る一里塚だと思います。その時期に身近に素晴らしいミュージアムがあることは、幸せなことです。

博物館の陳列は、時代を追って古い物から新しい物へとか、重要文化財はことさら勿体付けて、中央にドデンと大きなガラスケースに入るとかという慣習は、もう止めてもよいのではないかと思います。その博物館が誰をターゲットにしているのか、誰に一番訴えかけたいのか、によって展示方法も大きく異なるべきだと思います。偉そうなことを言って申し訳ありませんが、学生が4年間の大学生活中に、一度も博物館に足を運ばなかったことを、後年思い悔しがる、そんな博物館に是非して頂きたいし、関西大学博物館はそれに近づきつつあると信じています。

教育後援会の総会や委員会、就職懇談会には、是非ご父母の方々に、必ず見て帰っていただけるよう、私もPRの一端を果たさせて頂きます。

羽間理事長ご寄進の三原藩城主浅野忠義着用の五枚胴具足も、さらに輝きますようさらなる発展をお祈りし、高橋館長の倍旧のご尽力をお願いする次第です。

徳興里古墳壁画の七宝行事について

網 干 善 教

1

1976年12月8日、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の南浦市江西区域徳興里で壁画の描かれた古墳が発見され、12月16日から翌年の1月20日までの間に発掘調査が行われた。

古墳は舞鶴山西峯、玉女峰の南の丘陵上にあって、西約1.8kmの眼下には壁画古墳として著名な江西三墓が見降せる景勝の地にある。

古墳の構造は、高句麗古墳という半地下式石室封土墳の形式で、南に向って開口し、入口、羨道、前室、通路、玄室からなっている。

墓室は前室、玄室共に天井が穹窿平行持送り式と称されるものである。

石室の規模は羨道は長さ154cm、幅102cm、高さ142.5cm、前室は南北長さ202cm、東西幅297cm、高さ284.6cm、通路は長さ118cm、幅90.2cm、高さ137cm、玄室は最大長、南北長さ315.8cm、東西幅327.7cm、高さ289.5cmで、室内には棺台が置かれている。

この古墳は前室北側上段の154字からなる墓誌銘によって、被葬者は釈迦文佛の弟子である鎮氏、77才で死去、広開土王の永樂18年（408年、陽暦では409年2月20日）に柩が遷移され、埋葬された。

1986年4月と1991年4月に、北朝鮮政府の招請により、2回にわたって高句麗壁画古墳研究の第一人者、社会科学院考古研究所副所長、朱榮憲氏の案内によって実見することができた。

古墳石室内は墓室内全面に、余すところがないまでに、多くの題材の壁画が描かれていた。そのなかで、今ここで取上げようとするのは、



玄室東壁の七宝行事図の壁画



七宝行事図（部分）（玄室東壁上段北側）

玄室内東壁上段に描かれた“七宝行事”とされる壁画の題材である。これについて報告書には次の如く記述されている。

東壁には南に七宝行事図、北に蓮花図がある。

東壁の上下段には、七宝に関連する仏事を描いた。上段には、繁茂する樹木の南に、男子1人が座床に座り、木に向って両手をさしだしている。淡黄色の外衣を着、角のある幘をかぶる。この人物は、特別に大き





七宝行事図（部分）（玄室東壁上段南側）

く描いている。（中略）……その上に“此人為中裏都督典和七寶自然音楽自然飲食有□之燭□□□□”という説明文がある。これによって、座床上の人物が中裏都督の官職にあったことがわかる。

とある。また

樹木の北には2人の男子がやはり木に向かって拱手して立つ。その後に“此人与七寶俱生是故倫契知之”

とある。また

東壁南側の下段の南には2人の男子が右手で刀を抜き、北に向って立つ。その後には「此二人持刀侍□七寶□時」の文字がある。（中略）……中央部には、2人の男子が右手に器を捧持して北に向って立つ。（中略）その後に“此二人持菓□食時”の文字がある。（中略）……北には、2人の女子が南に向って拱手侍立する。後にかえして垂らした髪に、チョゴリ・チマをつけた姿である。その後も説明文があるが、判読できない。

とある。さらに北側部分の壁画には蓮花図があることの様相を説明している。図版説明にも「七宝行事図」とされる。

2

さて、この壁画の説明文「此人為中裏都督典知（主管）七寶自然音楽自然飲食……」の意味について報告書では、「この人は中裏都督（宮中官吏）になり、七宝を典知（主管）した時、自然に音楽を聞き、自然に飲食物を食べ……の意になる。と理解されている。

そして、別の項のところに

主人公の鎮は中裏都督の官職にもついていた。玄室東壁に仏教の七宝行事図があるが、その行事を指揮する人物の上に「此人為中裏都督……」の説明文がある。したがって、その説明文の下的人物、すなわち、七宝行事を指揮する人物がまさしく中裏都督であり、そしてこの古墳の主人公なのである。とみている。報告書のなかには“七宝行事”という用語がしばしばみられる。例えば、被葬者の官職を説明した文中にも「玄室の七宝行事図にある中裏都督という官職名」とか、「玄室の七宝行事図もやはり初見である」とかという説明がなされ、この七宝行事図は仏教による行事を表わしたものとされている。

ところで望月信亨編『仏教大辞典』、龍谷大学編『仏教大辞彙』や中村元編『仏教語大辞典』を繕いても「七宝行事」という項目は掲載されていない。但し『中華仏教百科全书』の「腊八粥」の項に「又称五味粥、七宝五味粥、紅糟、佛粥」があり、「作俗佛会、并送七宝。以諸果品、五谷煮粥、謂之腊八粥」というのがある。また丁福保『仏学大詞典』にも「諸僧寺送七宝五味粥」とあり「杭俗腊八粥一名七宝粥」とも、『佛光大詞典』にも「五穀等制七宝五味粥、稱為腊八粥」ともある。このように「七宝粥」や「腊八粥」のなかに七宝と称する仏教行事のあることが分かる。

『日中辞典』（小学館）の「腊（臘・臠）」の項には「旧暦の12月に多くの神を祭ることを“腊”といった」とあり、「腊八」について「旧暦12月8日、釈迦が悟りを開いた日とされ、古



七宝行事図（玄室東壁）

くはこの日に、腊八粥を作って食べる習慣があった」とする。そして「腊八米“腊八粥を作る材料となるもち米やアズキなど”」、腊八粥について「もち米で粥をつくり、中にクリ、ナツメ、落花生などを入れて甘く煮たもの」と作り方を解説し、併せて「腊八醋」「腊八蒜」を挙げている。すなわち、腊は12月で「八」は8日のこと、すなわち腊八とは12月8日を意味するということである。

仏教における12月8日は成道会の日である。但し、古来は12月8日とは限らなかった。『西域諸国表伝』には「天竺国十二月十六日、為腊」とある。『長阿含経第四』や『過去現在因果経』などの所説により2月8日、『大唐西域記第八』の所載による上座部伝承の3月8日、日本では『延喜式二十一、雅楽寮』にみる西大寺の成道会、『方等般泥洹経』、『灌洗佛形像経』などによる4月8日説などがある。一方、『法苑珠林第三十三』や無著道忠撰述の『禅林象器箋（報持門）』には『宝積経』を典拠として「十二月初八日都城諸大寺作浴仏会并送七宝五味粥謂之臘八粥」などとある。『望月仏教大辞典』にも「禅宗の流行と共に成道会の多くは十二月八日に行われることとなれり」とある。同様のことは龍谷大学編『仏教大辞彙』にも「禅宗流行するに及び十二月八日を以て之を修し、一に臘八会と称す。即ち三仏会の一にして、仏殿には出山の釈迦像を掛け、茶、湯、菓、菜、を供して諷経、廻向す」とある。

このことからみると、七宝行事とは、仏教においては成道会と共に行われ、七宝粥を施供する行事であったことが分かる。

3

「腊八」について『仏光大詞典』に

即毎年農曆十二月八日。依北伝仏教説法、該日為釈尊于菩提樹下成道記念日。腊、原為我國年末之祭祀名、我國、夙以農曆十二月為腊祭之月、習稱十二月為腊月、稱十二月八日為腊八。

とあり、続いて

日本禅林為記念仏陀成道、則手腊月初一至八日晨曉間、終止一切行事、昼夜唯坐禅修行。此系以釈尊在菩提樹下坐定為學習対象、除如廁、飲食外、悉以不起坐、不横臥

睡眠為原則、至八日黎明、在釈迦像前誦大悲咒后及結束法会、此称腊八接（撰）心、腊八大接心、而灌佛会、涅槃会合称为三大会

とある。このようにみると、七宝行事は腊、臘・臘といわれる一般的に十二月八日に行われる成道会の行事として、厳しい修行が行われると同時に七宝粥、仏粥、腊八粥などと称される供養が執行される三大法会の一つであったことが分かる。恐らく徳興里古墳の七宝行事も被葬者鎮氏は釈迦文仏の弟子であったことからその仏事を壁画として描かれたものであろう。

報告書によると徳興里古墳は、「墓誌銘によると、主人公の鎮氏は広開土王の臣下で、古墳は409年に完成したのである」とし「玄室の七宝行事図もやはり初見である」との見解を述べ、さらに、「徳興里壁画古墳が典型的な高句麗古墳であることは、当時の隣邦の古墳と対比するといっそう明らかである」とし、「このような古墳は高句麗以外の他の国にはみられない」との所見を付している。

換言すれば、このことは日本の壁画古墳とは全く異なった古墳であって、日本の壁画には高句麗の影響はみられないということでもあろうか。そして私見では、高句麗古墳の一部は符堅らによって伝えられた仏教信仰に基づくことであることを示していると考ええる。

なお、日本における七宝行事、すなわち十二月八日の成道会に七宝粥（腊八粥、七宝粥、仏粥など）を供養することは現在も京都妙心寺、大徳寺、相国寺等の禅寺で法会行事として厳修され、実行されているのである。

【参考文献】

- 朝鮮民主主義人民共和国科学院編『徳興里高句麗壁画古墳』昭和61年（日本語版講談社刊）
- 龍谷大学編『佛教大辞彙』（昭和10年）
- 望月信亨『仏教大辞典』
- 中村元『仏教語大辞典』（昭和56年）
- 白川静『字統』
- 諸橋轍次『大漢和辞典』
- 大塚民俗学会編『日本民俗辞典』（昭和47年）
- 禅学大辞典編纂所『禅学大辞典』（昭和53年）
- 無著道忠撰『禅林象器箋』（柳田堅山主編禅学叢書之九）
- 中文出版社『仏光大詞典』『中華仏教百科全书』、丁福保『仏学大詞典』

平成14年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介

高橋 隆博

「どんな博物館ですか?」。よく耳にするフレーズである。言葉の主は、いつ開館したのかとか建物の規模とか、ましてや施設やスタッフのことを聞いているのではない。「どんな作品を、どのような資料をもっているのか」、この一点を問うているのである。こんな話を持ち出すまでもなく、収蔵品はまさに博物館の「顔」そのものである。とはいえ、「顔づくり」はそうたやすくはない。当博物館は、本山コレクション(考古資料)をはじめとし、これまで各方面から、そして多くの方がたのご厚意によって「顔」がつくられてきた。収蔵品の充実には、こうした寄贈のほか、寄託そして購入によってはかられてきた。これまで収蔵する数点の中国陶磁器を充実するため、まことに貴重な予算を割き、昨年度は4点の中国陶磁器を購入し、平成14年度も引き続いて5点の中国陶磁器を購入した。

1、灰釉獸耳大壺(前漢～後漢時代 高51.2センチ、胴径38.5センチ)

胴の中央部を大きく張りだし、下方にすばまる姿をした堂々とした大型の壺である。こうした器型は大型のかめの呼称である罍(ろう)あるいは甗(せん)というべきかもしれないが、本作品はその折衷形をしている。外に広がる口縁の下方部と首部の付け根の2か所に縄(じよう)文をめぐらし、胴中央部のやや上部の左右2か所に耳を付け、すぐその上に獸頭形を飾っている。灰釉とは自然釉のことで、高火度で焼く窯では、焼成中に器に降りかかった灰によって素地の珪酸分が熔け、器の表面に自然に釉がかかることが多い。

前漢前期の灰釉陶器として確実なものは、湖南省の長沙馬王堆1号漢墓から出土した作例であり、埋葬時の封緘のままだものもあり、その付札や竹簡などによれば、スープや塩、塩辛などを入れた壺であった。おそらく本作例も墳墓におさめられた副葬品、つまり明器とみてよい。本来は蓋をとまなうものであった。前漢(前202～後8)から後漢(25～220)のほぼ400年間は中国陶磁史上、第1期の黄金時代といえる。

この時代は厚葬の風習がいよいよ盛んとなり、さまざまな明器を焼成し、墓域をかざった。華北では灰陶と緑釉陶が、華南では自然釉陶と灰釉陶の明器が好まれた。

2、白磁龍耳瓶(唐時代 高40.2センチ、胴径20.0センチ)

瓶の肩の左右から立ち上がった龍形把手の龍口が、長頸瓶の盤口をかむ形の瓶を龍耳瓶といい、唐代の白磁器にも、また三彩陶器にも比較的多く見られる器形である。そのふくよかで温和な姿形は、唐の安定した国力と華麗な文化を物語るにふさわしい流麗さを具備している。こうした器形の早い例としては、隋時代の大業四年(608)の墓誌銘を伴出した、陝西省西安市の李静訓墓出土の双胴龍耳瓶が知られる。本龍耳瓶は出土地を明らかにしないが、7～8世紀のものであろう。

灰釉陶や加彩陶、ついで黒釉や緑釉、褐釉などの釉薬をほどこした施釉陶磁の中にあって、「白いやきもの」の白磁の誕生は画期的であった。その開始時期については、今のところ東魏を襲った北齊(550～577)王朝下に生まれたとされている。河南省安陽市の范粹墓から出土した、白い透明釉をもつ高温で焼きしめられた白磁の四耳壺や碗がその根拠とされている。

「白いやきもの」には2種類がある。ともにカオリン質の高い白色の陶土(これに長石・珪石・蛙目粘土を加える)を用いることは同じだが、高火度の透明釉をかけた白磁と、低火度の透明釉をかけた白釉陶の2種類であって、本作例は後者に属する。

3、青白磁鑄文長頸瓶(宋時代 高25.0センチ、胴径12.2センチ)

鑄(しやう)(彫り文)の入った丸い胴に、これも鑄を入れた長首をつけた瓶で、首の中央左右に如意形の耳をつけている。口縁部の上下2か所に連珠文をめぐらし、その下に花文を飾り、首と胴の境界にもやはり連珠文をめぐらしている。宋



灰釉獸耳大壺



青白磁鏤文長頸瓶



白磁龍耳瓶

時代の青白磁の長頸瓶には瓜形胴をしている水注や瓶があるので、おそらくこれも瓜形瓶から発展した器形と考えられる。この長頸瓶には、もともと被せ蓋がついていたと思われるが、それを欠失しているとはいえ、その安定した姿形といい、シャープで洗練された造形感覚といい、宋代の11～12世紀頃、景德鎮窯でつくられた青白磁の逸品といえよう。その珍しい器形も貴重である。

青白磁とは、釉薬に含まれるわずかの鉄分が還元炎（燃焼に必要な酸素の供給が不足して、炭素の多い火炎による焼成）を受けて青味がかった白磁のことで、影青（インチン）ともいう。宋代の代表的な白磁窯は、華北の定窯（河北省曲陽県）と華南の景德鎮窯（江西省景德鎮市）であった。定窯は晩唐期には青味のある白磁を焼いていたが、宋代には象牙のような色調、たとえば璧玉を思わせる白磁を世に出し、景德鎮窯は北宋に入った11世紀前後に、透明度の高い青味がかった清冽な白磁、いわゆる青白磁を完成させた。



白釉鉄絵兎文瓶

4、白釉鉄絵兎文瓶（明代初期 高26.4ㇼ、胴径15.6ㇼ）

白化粧地に鉄泥で兎文と「信福」「寿」字を描き、その上から無色透明の釉薬をかけて焼成した瓶で、ユーモラスな兎の表情といい、いささか崩れた書体といい、磁州窯の民窯の作例であろう。鉄絵とは、弁柄いわゆる酸化第二鉄や黄土などの含有鉄泥で絵付けする技法で、鉄砂ともいう。日本では、こうした技法の作例を絵高麗と呼んでいる。朝鮮半島の高麗青磁のうちで黒絵青磁をそう呼称していたところから、これに類するということによってそのように呼ぶようになったらしいが、白釉鉄絵あるいは白地鉄絵というべきであろう。元代さらには金代に流行する技法だが、本作例は明代に入ってからのものである。

磁州窯は、北宋代に現在の河北省磁県の観台鎮や彭城鎮に築かれた窯であったが、やがて河北・山東・安徽・河南・山西・陝西省の各地に展開した。白化粧をほどこした陶器は華北全域で焼成されており、これら全体を磁州窯と呼ぶのが一般的である。磁州窯は、白釉陶と黒釉陶を特色とし、白泥で釉薬の下に線描するイッチ



青花宝相華文瓶

ン技法、鉄釉の上から鉄泥で文様を描く鏤花の技法、黒釉を掻き落として文様をあらわす掻き落とし技法、そして鉄絵技法に大きな特色がみられる。

5、青花宝相華文瓶（明時代 高23.6ㇼ、胴径12.0ㇼ）

すらりとした姿の典型的な梅瓶であり、この種の瓶では、蓋を失っているのが通常であるが、この作例の場合では、釣鐘形の被せ蓋をともなっているところが貴重である。青花つまり、日本でいうところの染付けによる意匠だが、3本の線条で全体を3区にわけ、肩のところには4つの如意頭形文を置き、そのなかに宝相華文をあわらし、胴部全体には宝相華文を描いている。下部には、景德鎮窯の青花磁器に特徴的にみられる、いわゆる「ラム式蓮弁」と呼ばれる文様をめぐらしている。蓋と頸部には、蕉葉文をあわらしている。蕉葉文は、元代の青花磁器にしばしばみられる。なお、如意頭形文だが、元来は中央アジアの花頭形文（カトーシェ）に由来する意匠である。青花の発色に生彩を欠くものの明代初期の作例とみてよい。

「簡文館」の円い建物について

川 道 麟太郎

関西大学の千里山キャンパスには、現在、三つの円い建物がある。一つは比較的最近に建ったもので、大学の入り口近くにある「新関西大学会館南棟」であり、他の二つは「簡文館」と「円神館」である。

この後者の二つは、どちらももとは図書館として建てられたもので、ともに建築家村野藤吾の設計による。村野は文化勲章も受賞した日本を代表する著名な建築家であり、彼の長い活動期間の中で円い建物も数多く設計しているが、中でも図書館については、関西大学のもののほかに、甲南女子大学の図書館の大閲覧室や、戦後間もないころ計画した「宇部図書館」などがある。図書館を円形にした理由としては、図書館を知の殿堂と見て、それを象徴的に円形で表現しようとしたことや、閲覧室に求心性を与えてその空間に秩序と静謐性を持たせようとしたことなどが考えられる。また、村野が戦前に訪れたストックホルム市立図書館の円形大閲覧室での感銘が影響していたとも考えられる。

しかし、関西大学の二つの図書館を円形にした最大の理由は、やはりそれが建つ立地条件にあったと思われる。と言うのも、この二つの建物とも、周りに建物や通路が出来上がっていたところに、新たに建物を差し込むように建てるという状況にあったからである。「簡文館」は既存図書館の増築としてその建物の前面に付加するように建てられ、「円神館」は周りに経営学舎や工学部学舎が出来上がった中で、その中央部の場所に嵌め込むように建てられた。周りの既存の建物に対してできるだけ圧迫感を与えないようにするには、長い壁面を相手方に対面させないように円い形にするのがよい。「簡文館」の場合は既存の図書館からぼこんとこぶが飛び出たような形になっているし、「円神館」の場合は四周に道路がくるところから、それらに均等に配慮して特定の正面をつくらない形になっている。「簡文館」の場合は、さらに、高台にあって多方面からよく見られる位置に建つということも大いに関係していた。近年に建っ

た「新関西大学会館南棟」が円くなったのも、既に出来上がっていた環境の中に、後から建物を差し込むように建てねばならなかったことによるところが大きい。

ところで、円い建物はその形態の求心性や完璧性の故に、利用面では融通性に欠けるものとなる。部屋はつくりにくく、机やその他の家具配置の自由もききにくい。要するに、特定のやり方以外に融通がきかないのである。図書館も無論、その中身は変わっていく。蔵書は増えていくし、要求される空間機能も変わっていく。近年では、図書館資料の中でも特に AV 関係の資料がどんどん増え、本を読むという従前の閲覧形態から機器を介した閲覧形態へと変わり、パソコンを使った検索・閲覧方法や機械方式による管理システムの変化も著しい。空間利用や増・改築の融通性に欠ける建物では、それらの変化に対応しにくく、その運営は難しいものとなる。図書館として建てられた建物も、30年足らずで他の用途の建物へと転用が余儀なくされる。実は、このような建物の転用はどんな建物でも割合によく起きていることなのである。本来、建物はしっかりと建てられれば物理的には長くもち、百年を越えて建ち続けることも少しも珍しいことではない。しかし、建物が百年も



簡文館（旧・千里山図書館の頃）（関西大学年史編集室提供）



円神館（旧・専門図書館の頃）（関西大学年史編集部提供）

建っていると、その間に中身が変わらないなどということはまずない。成長もするし運営方式の変化も起きる。用途が変われば、無論、それに求められる部屋の機能や空間の形態も違ってくる。用途に見合った改造や増築が必要となるのは当然である。しかし、円い建物ではそれが困難な要求になる。

村野が設計した関西大学の二つの図書館は円いだけでなく、形態の上でもう一つの共通点がある。1階部分がともにピロッティになって吹き放ちになっていることである。それによって建物を浮かすようにして、地上面での見通しをよくするとともに実際の利用上もそこを開放的にしているのである。実際、「簡文館」はかつて運動場の北東端の高台にふんわりと浮かぶような姿で建っていた。また、その建つ高台からは大阪都心部方向に素晴らしい眺めを得ることができた。千里山という丘陵地帯に立地する本学にふさわしい、見通しのきく絶好の場所であった。「円神館」も開放されたピロッティの下で、学生たちが雨の日には雨宿りをし、また日差しの強い日には日陰としてよく集っていた。しかし、二つの建物とも、図書館として使われていた時代に、そのピロッティの大部分が屋内化されてふさがれてしまった。増築の行き場を持たない図書館としては仕方のないことであつたのだろう。

しかし他方、建物はその形態の強さや象徴性の故に、記念的であり永く保持されるというこ

ともある。西欧には石や煉瓦で造られた円い建物が多くある。西欧ではこの円い建物に「ロトンダ」という特別な用語が当てられている。ヴェスタ神殿、パンテオン、ヴィラ・カブラなど、時代を越えてのこる「ロトンダ」の例は枚挙にいとまがない。村野によって千里山キャンパスに建てられた円形の建物も、まさしく象徴的で記念的である。「簡文館」が歳月を経て、関西大学博物館として使われるようになったことは、この建物にとってまことに僥倖であった。

確かに、円い建物は転用するのに扱いにくい建物である。増築や改築もままならぬ。関西大学博物館も「簡文館」を博物館として有効に使うために苦勞をされ、また現在さまざまな課題をかかえておられると聞く。しかし、関西大学創立70周年記念として村野の手で設計されたこの建物を、本学の博物館の建物として生かしていくことは意義深いことである。近々、120周年を迎える本学にとって、この建物の保存と再利用を考えることは価値ある課題である。また、建築畑の筆者から言うなら、こういった記念すべき優れた建物の保存・再生の仕事にこそ、真に実力のある建築家を加えるべきである。今や日本でも、新築のみではなく、保存や再生の仕事に、それは地味ではあるが、真の建築家の力が問われる時代になってきている。「簡文館」が博物館の建物としてとして立派に機能するとともに、関西大学の歴史的・文化的遺産として後世に引き継がれていくことを切に望むものである。「簡文館」の建物は時間を経るとともに、関西大学の歴史を語る証人として、また本学のキャンパス・アメニティを高める要素として、その価値をますます高めていくに違いないと思うからである。

『伊勢物語』の彫りと摺り ——博物館における体験学習の一事例——

明 尾 圭 造

1. 芦屋と『伊勢物語』

平成12年、芦屋市立美術博物館では市制施行60周年を記念して特別展「伊勢物語と芦屋」を開催しました。

『伊勢物語』第87段が芦屋を舞台としており、芦屋浜と布引滝が歌名所として登場するからです。展覧会では様々な美術工芸品を展観しましたが、あらためて「嵯峨本伊勢物語」の果たした役割の大きさを再認識しました。そこで、嵯峨本のなかから「芦屋浜」の挿図をもとに限定木版画を制作しようと考えたのです。そして、京都の芸艸堂と竹中木版の全面的協力によって出来上がったのが「芦屋の浜図」(写真2)です。

2. 京版画竹中木版と体験学習教室

特別展以来、竹中木版の若き5代目竹中健司氏には夏期に実施される体験学習教室でお世話になってきました。従来、本館は美術と歴史部門からなる複合館で、夏期の体験学習も美術系ワークショップと歴史系の体験的なものがあります。参加方法も市広報を通じた公募と当日自由に参加出来るものなど、バリエーションに富んでいます。ただ、夏期の児童向け企画が重なることから、ここ数年、筆者は意識的に成人対象の応募形式をとっています。

こうして、平成13年には芸艸堂から歌麿の版木(江戸時代の原版)をお借りし、竹中氏の指導のもと受講生が実際に歌麿の版木を摺るという講座を企画しました。



写真1 原図の描線を強調する



写真2 『芦屋の浜図』 嵯峨本から記念製作

3. 木版教室の準備

今年の体験学習教室では、上記「嵯峨本伊勢物語」の「芦屋の浜図」と「布引の滝図」を原画として利用し、いずれか好みの作品を彫って摺るということにしました。

まず、嵯峨本から両挿図の写しをとり、それを反転させて原図とすることから始めました。また、受講生には『伊勢物語』第87段の全文をテキストとして用意し、芦屋市内の伊勢物語古跡図を添付して理解を深めていただこうと考えました。惜しむらくは講座実施前に受講生に資料を送付できなかったことで、各自に伊勢物語のイメージを作っていただくにはあまりにも時間が少なかったことです。

また、募集24名に対し13名の受講生となりましたが、2日間(7月19日・20日)で彫って摺るという強行スケジュールでもあったため、結果的には講師の目配りが出来るギリギリの人数であったと感じました。

4. 博物館実習生の参加

本館では、毎年7月から8月にかけて博物館実習生を受け入れています。こちらも美術・歴史部門で別個に受け入れています。今年は総員37名を4班体制に分け、歴史は9名ということになりました。博物館の内実を紹介したり、資料取り扱い実習などは他館と変わるところはありません。しかし、体験学習に積極参加することが本館実習の大きなポイントになっています。初めて接する参加者との人間関係を構築したり、講師の指示だけでなく自分で仕事を見つけたという自主性も重視しているのです。

5. 彫りと摺りの実施

実際の作業工程を列記してみますと、まず、反転させた原画のなかから、「芦屋の浜」か「布引の滝」を選定し、決まれば描線を太マジックペンでなぞっていきます（写真1）。そして、



写真3 期待の試し摺り

4色以内に色分けして版木（B4サイズ）に転写していくわけです。この段階で、自分の技量と制作時間のことを考えて4色を2色に、あるいは登場人物を3人から1人にするなど受講生によって原画は少しずつ違ったものになってきました。

例えば、4色摺りでいく場合、B4の版木1枚に2面（B5縮小原画）分を転写し、都合2枚の裏表を彫り上げねばなりません。つまり、必要な描線を残し、その周囲を粗彫りしていくのですが、平均年齢60才弱の受講生にとって、ここが一番の難関です。

そこで、実習生が分担してこの作業（写真4）のサポートに入ることになりました。実際には「この部分頼みますよ」と言われる受講生は希で、実習生に積極的に申し出るように指示を出



写真4 粗彫りに挑戦する実習生

しました。なかには「全て自分でやります」という方も当然おられるわけで、この微妙なニュアンスの差を的確にキャッチできるか、これはよい体験になったと思います。

実習生の無心のサポートにより、ほぼ時間内に彫りが一段落しました。いよいよ試し摺り（写真3）に挑戦です。微妙なズレや色調のバランスなど実際に摺ってみなければわかりません。そして、試し摺りをもとに最終調整に入りました。この段階でも、3色刷りの用意をされたのに墨1色に変更された方や、色がもっと欲しいということで手彩色や裏彩色の技法を活用された方もあります。かくして、同じ「芦屋の浜図」を撰べた方もそれぞれが違った雰囲気の商品（写真5）に仕上がりました。

6. 展望

今回の教室は、2日間で木版画の彫りと摺りを体験するという欲張った内容であったため、それぞれの技法を十分に習得することが出来なかったようです。次年度は芦屋の伊勢物語古跡を参加者自ら描いていただき、それを原画として彫りと摺りを実施する。そして、完成作品は出来れば展示までもって行ければと考えています。



写真5 出来上がった作品

鹿児島県上野原遺跡「縄文の森」を訪ねて

上 杉 彰 紀

上野原遺跡は鹿児島県国分市に所在する縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺跡は鹿児島湾をみはらす標高250m前後のシラス台地上に立地しており、鹿児島県を象徴する桜島の雄大な姿も遠望することができる。

上野原遺跡では1991～97年にかけて調査が行なわれ、広範な面積に遺跡が広がるとともに、きわめて濃密かつ豊富な遺構・遺物が存在することが明らかにされている。調査は国分上野原テクノパークの造成工事に伴って開始されたが、調査の結果、きわめて重要な遺跡の存在が確認されたことから、遺跡の保存が企図され、国指定史跡として整備が進められることになった。2002年10月には史跡整備が完了し、「上野原縄文の森」として出土資料の展示施設とともに一般公開されるにいたっている。また、2001年および2002年には縄文時代早期に関する調査報告書が鹿児島県立埋蔵文化財センターにより刊行されている。

上野原遺跡のうち、特に注目を浴びたのは第3工区（第10地点）および第4工区（第2～7地点）である。

第3工区は主に早期中葉～後葉（特に妙見式期・平栴式期・塞ノ神式期）を中心とする時期の遺跡で、膨大な遺物が出土している。この時期の壺形土器を埋納した遺構や土偶、多様な異形石器など、祭祀的な色彩の強い遺物が多く含まれているだけでなく、遺物の分布が中央の稀薄部分を中心に環状にめぐるという興味深い遺跡の構造も明らかにされている。

第4工区は主に早期前葉（加栗山式期）を中心とする遺跡で、当該期の竪穴住居が52軒に及んで確認されており、発見当初は「最古の定住集落」として全国的にも脚光を浴びることとなった。最終的には一時期に同時に存在した軒数は5～6軒と推定されたが、それでもなお一土器型式の時間幅の中で多数の竪穴住居が繰り返し構築されたことは、遺跡の性格を考える上で



整備された上野原遺跡



体験学習に利用される復元炉穴

きわめて重要な手掛りとなっている。

このように上野原遺跡では多くの貴重な発見があり、南九州の縄文文化を象徴する役割を担っている。広範な面積の調査が行なわれ、遺跡の全体的な姿が明らかにされたことから、一躍南九州の縄文文化を象徴する遺跡としてその名が知られるにいたっている。

さて、現在上野原遺跡を訪れると、第4工区で発見された竪穴住居や集石遺構、土坑などの遺構の発掘時の姿をそのまま保存した遺跡保存館や、遺構を復元した屋外展示、出土遺物を展示する展示館が設けられている。展示館では上野原遺跡の出土遺物だけでなく、南九州各地の遺跡の資料も展示されており、上野原遺跡の重要性を実感することができる。また、遺跡地内では調査成果に基づいて当時の植生を復元するように植林され、復元された炉穴や集石では調理実験が行なわれており、見学者が縄文時代の人々の生活を体験することができるよう工夫されている。そこには新東晃一氏が中心となって進めてきた長年にわたる地道かつ着実な研究の成果が反映されており、研究活動と普及活動がうまく一体化されているように思う。

しかし一方では、上野原遺跡における往時の人々の生活の実態はほとんどわかっておらず、むしろ遺跡の評価はこれからの研究によるところが大きい。第4工区の早期前葉の集落跡に関しては、多数発見された竪穴住居を取り巻いてどのような生活が営まれていたのか、あるいは

一土器型式内（加栗山式期）で多数の住居が反復的に構築・廃棄されたとするならば、それはどのような空間利用の原理に基づいていたのか等々、多くの興味深い疑問が湧いてくる。また、第3工区における多くの祭祀性の強い遺物の存在は、実態としてどのような行為を物語っているのか、あるいはなぜこの時期にこうした祭祀行為が大規模に行なわれたのかなど、遺跡の評価にとって大きな課題となっている。

ところで、南九州では上野原遺跡のほかにも多くの重要な縄文時代早期の遺跡の調査が行なわれている。上野原遺跡に共通する性格を有すると考えられる遺跡もあり、上野原遺跡にとどまらず、点から面へと視野を広げ、再度その面の中で個々の遺跡を位置づけていく必要がある。研究の進展の中で遺跡の評価が刻々と変わることとは当然のことであり、むしろその方が望ましいと考える。上野原遺跡がさまざまな面で南九州の縄文文化の象徴的存在であることは変わりないが、遺跡に対する評価が固定化することなく、研究の進展とともにその成果が遺跡の理解や普及活動に反映されていくことを切望する。

「縄文の森」が名実ともに南九州の縄文文化に関する研究活動と普及活動の場として豊かな実りを育んでいって欲しいと思う。

上野原縄文の森ホームページ <http://www.jomon-no-mori.jp/>

博物館だより

◇平成15年度博物館企画展「東アジアの壁画古墳」を4月7日（日）～5月17日（土）の期間に開催いたしました。今年度の企画展は高松塚・キトラ両古墳と朝鮮半島、特に高句麗の古墳の壁画とを比較観察し、東アジアでの壁画を巡る思想的な交流を探ったもので、4月6日（日）と5月18日（日）の特別開館日を合わせると約2,000名の入館者がありました。

また、5月17日（土）午後1時半より3時半まで平成15年度関西大学博物館講座「東アジアの壁画古墳」を開催いたしました。高松塚古墳で壁画を発見された網干善教 関西大学名誉教授にご講演いただき、148名の参加者が聴講されました。



講演会 風景

◇関西大学博物館「なんでも相談会」

平成15年8月25日（月）・26日（火）の2日間、関西大学博物館初の試みとして、「なんでも相談会」を開催いたしました。学芸員課程を担当する教員・学芸員と博物館実習受講生とが、小中高生の自由研究課題から一般の方の所蔵する「お宝」まで、あらゆる疑問の相談に乗り、解決の手助けをいたしました。両日で約30件の相談があり、相談者の方にも喜んでいただけたようです。また、博物館実習生にとっても得がたい経験をさせていただいた2日間でした。



「なんでも相談会」 相談風景

編集後記

『阡陵』第47号をお届けいたします。今号のトップは教育後援会の田島会長にご登場いただきました。学生を支援するご父母の立場から関西大学博物館を語っていただき、お寄せくださる信頼と期待に身が引き締まる思いです。また、今年度の企画展にちなんで網干善教名誉教授より朝鮮半島の徳興里古墳について、工学部の川道麟太郎教授には博物館のある建物「簡文館」について、芦屋市美術博物館学芸員の明尾圭造氏には博物館体験学習について、非常勤講師の上杉彰紀氏には鹿児島県上野原遺跡のご紹介の玉稿をいただきま

した。ご執筆くださいました先生方に感謝申し上げます。

平成14年度購入資料は館長の高橋隆博教授より紹介いたしました。平成13年度より計画的に中国陶器を購入し、博物館所蔵資料の充実を図っております。

表紙は轡（車轡）です。轡は中国の西周頃に盛行した車馬具の部分品の一種で、軛の頂頭に付けられる発音器を兼ねた飾りです。上部の球体部分に金属製の丸弾を入れ、馬が歩走する時に発音し、妙なる音を楽しむという目的を持つものです。